

動ではなく、自性自身が空としての無自性であることを――従って世界そのものも無自性であることを――自覚した自性の構想力の発動、と考えることができるのではないであろうか。

明治期キリスト教と巡礼ツーリズム

岡本 亮輔

一九〇五―六年にローマ、パレスチナを旅した牧師・山田寅之助の巡礼紀行は恐らく近代日本最初の聖地旅行記であり、徳富蘆花などその後のキリスト者の聖地旅行にも影響を与えた。だが管見の限り、これまで山田の旅行記が本格的にとりあげられたことはなく、わずかに言及される場合にも、誤解と偏見に満ちた「奇書」として扱われてきた。山田の聖地旅行の記録は『埃及聖地旅行談』と『羅馬観光記』の二冊にまとめられている。

山田によれば、いずれの書もキリスト教の体験的・実見的理解を目指して聖地ガイドブックとして書かれているが、そこには否定的に見える記述が少なくない。『羅馬観光記』では、英仏に比べてイタリアの鉄道が揺れるのは「其文明の程度の低い事を自白する」ものだと言われ、駅に着けば「古臭い怪しき建物」の広がる「拝みたくとも拝みようのない雑風景」であると言いつつ、チップを求めた荷物係を乞食呼ばわりする。繁華街を求めて市内を歩けば、裏通りの「不潔にして闇黒なる」様子に辟易し、市区改正で「帝国首府の外観」を保つ東京市に比べてローマの電車は「児戯」に等しく、テヴェレ河を目測しては「我隅田河の半ばにも及ばぬ」と嘆く。

牧師の山田がカトリックの総本山ローマに批判的なのは想像に難くないが、事情はエジプトやパレスチナについても変わらない。ラクダに乗るエジプト人を見かければ、「彼等が世界の文明におくれて下等な生活を送て居るのは驢馬や駱駝の感化である」と言い、「エジプト國は古代文明の墓である、今のエジプト人は其墓守に過ぎない、実に憐れむべき國民である」と言う。パレスチナへ向かう汽車で初めてユダヤ人を見た時には「或はイスカリオテのユダのような容貌だと云へば善いかも知れない、勿論私はユダを見たと言っているのではないが、書にあるユダの容貌其儘である、書にあるヨハネのような容貌などは見たくともない、パレスチナに滞在中遂に一人もそんな顔を見た事がなかった、容貌までも墮落したものと思はれる」と言い、嘆きの壁で祈るようなことをしているから容貌が陰気になると結論する。こうした山田の観光態度は既往研究においては無知や厚顔として扱われてきた。

しかし、そもそも山田が体得していた明治期プロテスタントイズムとは、単なる教養や文化の下支えではなく、もともと端的な意味での国家観や政治観を導く社会思想としての性格も備えていた。山田において宗教は人間社会の開化と共に進化するものであり、プロテスタントイズムはそうした宗教史的展開の終局に位置づけられる最先端の社会改良思想であり、物質的繁栄の精神的基盤に他ならない。そしてそうした思想が導く宗教史観の下では、パレスチナやローマに刻まれた過去はすでに歴史的に克服された段階にすぎず、そこに留まることは現在における停滞に他ならない。

こうした点において、山田の聖地行は現代の宗教ツーリズムとは大きく異なっており、文明主義的ツーリズムと呼べるような性格を備えていたと言える。過去を甘美なものとしてではなく、社会進化の段階で克服されてきたものとする文明主義的ツーリズムにおいては、パレスチナもローマも原理的に値する場所ではなく、期待をもって訪れられる場所ではなかった。それは近代社会の思想的支柱としてのプロテスタンティズムによってすでに乗り越えられた過去の文明の停滞した景色に過ぎなかったものであり、山田の聖地行においては、過去の痕跡ではなく、未来の予兆こそが聖地に探し求められたと考えられるのである。

内村鑑三の神名解釈

渡部 和隆

内村鑑三の聖書解釈は救済史的な枠組みを有しており、その分析のためには内村が救済史の主体である神をどのように把握していたかを明らかにする必要がある。本発表はこの問題を解くための手がかりとして内村鑑三の神名解釈、すなわち出エジプト記三章一四節の「在りて在る者」の解釈を分析する。使うテキストは『出埃及記講義』（全集二二巻）と『モーセの十誡』（全集二五巻）との二つである。

『出埃及記講義』では、内村は神名から二つの解釈を引き出す。一つは「永遠の実在者」「永遠のアーメン」（全集二二巻、二八四頁）、すなわち神名は宇宙の創造主にして全能者という神の本質を表しているという解釈であり、もう一つは「恵を己

に湛へて他に俟たざる実在者」（同上、二九〇頁）、すなわち人間との関係にあつて人間に対して恩恵をもって臨むという神の態度を表しているという解釈である。そして、後者の内容は新約聖書におけるイエス・キリストの啓示で表されているものと連続していると解釈されている。

『モーセの十誡』では、内村は当時の聖書学に倣って神名に生成の意味を読み込み、「在らんとする者」として在らんとする者」（全集二五巻、一五八頁）と訳し直す。その上で内村は神が生成するということを、真理と恩寵との啓示が歴史的な時間の中で次々とより強い強度で人間にもたらされ続けることだと解釈する。

つまり「エホバは永久に『在らんとする者』である、今日のエホバは明日のエホバではない、明日は今日よりも更に大にして貴く、明年は今年よりも更に大にして貴く、斯くて十年又百年、永遠に亘り限なき真理と恩寵とを人類に現示し給ふ者である」から「アダムに現はれしよりもノアに至て更に深く己を顕はし、アブラハムには更に貴く、モーセには更に大に、イザヤ、エレミヤ、ダニエル等には更に明かに、而してイエスキリストに於て一度び完全に現はれ給うた、而も人の之を認むる能はざるや又使徒等を通して更に遠大なる約束を我等に遺し給うたのである。」（同上、一五九頁）というわけである。かくして内村は神名に生成の意味を読み込むことにより聖書中のさまざまな登場人物を連続性の相の下で把握するに至った。彼らはいわば神の啓示のグラデーションとも呼ぶべき関係にある。聖書の各々の書は神の啓示のグラデーションとして連結され、イエス・キリストという個体において最も純粋な強度の啓示に至